

---

# 仮面ライダー鴉 Maskrider KARAS

神羅和刃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー鴉 Maskrider KARAS

### 【Zコード】

N9114D

### 【作者名】

神薙和刃

### 【あらすじ】

妖怪から進化した兇魔<sup>まがき</sup>延る街を往く孤高のダークヒーロー見参！  
その名は仮面ライダー鴉！

## 第一羽 牙鳥

鴉  
からす

艶やかな黒さを持ち

知能は鳥類の中で群を抜いて高い

かつて神武天皇が東北へ遠征した際  
三本足の鴉が神の使いとして神武天皇を大和へと導いた。

その時天皇と密約を交わした鴉は、天皇と人々、人々の住まう都を  
守る守護神として末永く奉られた。

そして時は移り変わり

西暦2008年 東京

「魔のトンネル？」

都内にある帝都大附属高等学校。

そこの3 - Aの教室

ウルフカットにした髪を窓から入ってきた風に靡かせながら、美幸はその単語を反芻した。

その反応に満足したように栗色のショートヘアを縦に揺らし満面の笑みを浮かべる陽向は話を続ける。

「そうね、この街の隅っこにもう使われてないトンネルがあるんだけどね。そこに出るのよー。」

「出る…って？」

「よ・う・か・い」

くふふふふー とかなり独特な笑い声をあげ楽しげにする陽向を尻目に、美幸はハアと短く溜め息をついた。

美幸自身はこいつたオカルト系統の話は嫌いでは無い、と言つより好きの部類に入るのだが、陽向の様に自ら好き好んで心靈スピットへ立ち入るのは良しとしない。

前も廃校になつた小学校に幽霊が出ると陽向に言われ、散々振り回されたのにガセネタだつた挙げ句、後で近隣住人による通報で駆け付けた警官に見つかりお叱りを受けたと言つ苦い過去もある。

しかもそれは一度や一度なんものではなく、月に何度も起きると言つのだから始末が悪い。

だが陽向自身は良い子だし、付き合つてると疲れるとは言え結構楽しい。

だから美幸は陽向の友達で在り続けている。

「仕方ない。陽向ちゃんに付き合って差し上げましょ」

「ホント!? 美幸大好きだよーう!」

パアアアアと言う晴れやかな擬音が似合いそうな程に顔を輝かせ美幸に抱きつく陽向。

苦笑しながらもそれを何とか受け入れ陽向の頭を撫でてやる美幸。母と子みたいな構図で周囲のクラスメートが和む。

「じゃあ今度の日曜日に学校前ね!」

「はいわかりました」

指切りをした直後、始業を知らせるチャイムが鳴り響き、陽向は自分の席へと戻る。

先生が来るまでのタイムラグ。

何気なく窓の外を覗く美幸の目に鳥が映る。

鴉である。

「なんか縁起悪いなあ

世間一般的な鴉のイメージをつぶやく美幸。

やがて教室に先生が入ってきたとき、その物思いを止めた。

都内某所

そこには稼働不可能になつた重機が群を成して廃棄されている。

ボディの塗装は剥げ、剥き出しの金属部は錆にまみれ、現役だった頃に活躍していたであらうその面影は無い。

今はただ朽ち果てるのを待つしかないだけだと考えると一抹の侘びしさを覚える。

だが、氣のせいだろうか  
重機がわずかに動く。

がちゃり。と

チーンが軋む音を皮切りに重機の群れがガタガタと一斉に鳴動し始める。

まだ我々は生きている  
この身は生きているのだ

そう主張するかの様に重機の群れは武者震いの「」とく震え始めて自

壊を始める。

しかしただの自壊ではない。

不必要な、もう使えなくなつた部品を削ぎ落とし、互いに使える部品のみを固めて一つの形をなす。

遠巻きに見ればそれは獣。

強固な装甲はもちろん、四肢すら鋼を纏い、コクピットだった部位は獲物を捉える為の顎と化している。

鎧による鈍い音はもはや鳴き声に過ぎず。

重機の群れから生まれた『いのち』は血の生誕を祝うかのよう虚空へ吠えた。

クレーンから出来た爪を瓦礫に引っ掛け、獣は進む。

まずは祝いの食事だ。

腹の内に山ほどの餌を！

涎の代わりに、体内に残つていた燃料を顎から撒き散らし、のそのそとの場を後にする獣。

それを離れた場所から見つめる男と少女

お互に漆黒のコートに身を包み、少女は髪を両脇に結わえた所謂ツインテール。

男は眼深に帽子を被つてゐる。

「那智」

那智と呼ばれた少女は言葉を発さず、静かに頷く。

「初仕事だ。見事あの『いのち』を討つて見せよや」「云うに及ばず」

一一言一一言交わし、一人は霧のように消え失せる。

後には何事もなかつたかのような静けさが存在していた。

某日正午

都内某所 『魔のトンネル』

陽向と美幸は魔のトンネル内にいる。

昼間だと云つのに陽光は差さず、空氣も氷の様に冷え切つてゐる。

さながら本格的な心靈スポットといふべきか

陽向は嬉しそうにトンネルの様子を写真に収めている。

その後ろを呆れながらも楽しそうに美幸は付いて回る。

「うーん…いいねえいいねえ」の雰囲気…」

「ん、ん…」

陽向は普段から『オカルトさえあれば旦那も飯もいらない』と豪語し、その言葉通りにオカルトが絡めば寝食を忘れて没頭するのだ。

なにか将来、アヤシイ仕事に手を染めなきゃいいんだけど。と不安がる美幸を余所に嬉しそうにほほえしゃぎ回る陽向。

「おひ?なんか元氣無いね美幸たんは」「そりゃ元氣にはならないでしょ。こんな場所で」

それもそうねん。と陽向は休憩を提案し、それを承諾した美幸は地べたに座る。

休憩中にもかかわらずカメラを取り続ける陽向は楽しげな笑みから何かを懐かしむような、穏やかな笑みを浮かべる。

「どうしたの?」

「いやむ、寝かしつけやつて」

その言葉に何か思い当たる節があるのか、美幸もまた表情を変えた。

疲れた表情から

何か、痛みをこじらせるかの様な表情で。

「小やこじわむさし、よく行つたじやん。私と美幸とな

「止めて」

陽向の声を遮るように言葉を発する美幸。

叫んではいらないものの、どこか有無を言わせぬ迫力が溢れてくる。

陽向は何かを思い出したのか、ヘマをやらかした時に浮かべる失念の表情とを同時に浮かべる。

暫く気まずい沈黙が流れ、お互い視線を合わせない。

陽向は向こうを向き、美幸は体育座りのまま俯いている。

やがてその沈黙に耐えかねたのか、陽向が口を開こうとした。

その刹那。

ドゴォオオオオン！

『一。』

二人から数メートル離れたトンネルの壁が轟音を立て弾け飛ぶ。

二人が何事かと思い壁を見たら、そこには塗装の剥げた、鏽びた装甲が剥き出しの重機の一部が見えた。

「えー!? 嘘、取り壊しの予定とか無いはずだよ!」「ちょつ、どうするの陽向! 早く逃げないと怒られる…、つてか埋められちゃうよ!」

わたわたする二人

しかしその瞬間にはそのわたわたが戦慄へと変貌する。

重機の一部がせり上がり、犬の足の様に地面を踏みしめる。それから作動音とローンの音、地面を穿つ音を立てながらその巨大を露わにする。

それはショベルカーの胴体にクレーンの四肢、様々な重機のコクピットが顔と化した獣。

廃棄場所から再誕した『いのち』だった。

「なつ…ななななな！」

「ば、化け物つ…？」

完全にパニックに陥った二人は立ち上がることも出来ず、ただ座りこんだまま微動だにしている。

『いのち』はそんな二人を捉えたのか、機械的な雄叫びを上げ近づく。

やがて『いのち』が一人を取つて喰らおうと身をかがめた。

その瞬間。

リーン。

「……うえ？」

「鈴の……音……」

陽向と美幸と『いのち』

この三つしか居ないトンネルのなかに響く清涼で澄んだ鈴の音。

訝しげに後ろを向く『いのち』

そこには入り口から差す僅かな陽光に背を向けるポートの男がいた。

トンネルの外入り口

そこに寄りかかる少女、那智は懐から紙を出す。

鳥を思わせる紋様と、へらで書かれた様な奇怪な文字（梵時）が連ねられた和紙だ。

『血の誓い』により、己が内の三千世界の淵に沈みける鎧よ。汝の  
「鳥」に  
「牙」を成せ』

その祝詞に呼応し、トンネル内の男の腰にベルトが浮かび上がる。八卦を模した、玄武石の様な鈍い黒色のベルトは徐々に輝きを増す。

「…うえ?  
「鈴の……音…」

陽向と美幸と『いのち』

この三つしか居ないトンネルのなかに響く清涼で澄んだ鈴の音。

訝しげに後ろを向く『いのち』

そこには入り口から差す僅かな陽光に背を向けるゴートの男がいた。

トンネルの外入り口

そこに寄りかかる少女、那智は懐から紙を出す。

鳥を思わせる紋様と、へらで書かれた様な奇怪な文字（梵時）が連ねられた和紙だ。

『血の誓い』により、己が内の三千世界の淵に沈みける鎧よ。汝の  
「鳥」に  
「牙」を成せ』

その祝詞に呼応し、トンネル内の男の腰にベルトが浮かび上がる。八卦を模した、玄武石の様な鈍い黒色のベルトは徐々に輝きを増す。

「変身」

男が短く告げた瞬間、ベルトからは無数の黒い羽根が吹き出し、あたりを覆い尽くす。

誰も彼も目を上げてられない漆黒の濁流の中、美幸は見た。  
帽子を眼深に被った男の顔を。

「嘘…」

やがてその羽の濁流が終われば、男は異様な格好をしていた。

猛禽類を思わせる爪の付いた手足の装甲。

肩を覆う翼の様な装甲には嘴の如く鋭利な突起が存在している。  
顔を覆う装甲は鳥のを象ったかの様に鼻の部位が鋭利に前方へとせり上がり、似つかわしくない二つの眼が暗闇に爛々と輝いている。  
節々には鎖が巻かれ、首からは鳥の羽根らしきものがある。

腰に下げた刀を抜き放ち、垂直に構える男。  
黒づくめの格好はまさに

「カラス…」

陽向の喰いた通りにカラスだ。

男は『いのち』に向かい、見栄を切るようにそりんじる。

「牙」をなす  
「鳥」

「仮面ライダー鴉、推参」

『いのち』が恐れをなしたかのように吠え、鴉に向かい突進する。己の内に芽生えた恐怖を振り払つために。

しかしそれが命取り

それより早く鴉が縦横無尽に、『いのち』と縛る紐の様に黒い軌跡を残しトンネル内を駆け巡る。

やがて鴉が『いのち』の背後に現れ刀を鞘に納めれば、『いのち』の体は細切れにされ無数の鉄くずとして崩れ去つた。

体内に残っていた燃料に装甲を斬る際に生じた火花が引火し爆発を起こす。

『きやあああ！』

爆風に吹かれ目を閉じる一人。

やがて目を上げればそこには燃え盛る鉄くずと一人しかいなかつた。

「……だ、大丈夫？」

頭が混乱しているが、なんとか美幸の無事を確認し容態を問う。

しかし美幸は答えず、呆然と炎の奥に搖らめく景色を見ながら呟いた。

「鳴海君？」

トンネル外

コートの男 鳴海は那智の側へ歩く。  
その様を見た那智は静かに微笑む。

「よくやった鴉。あれほどの実力なれば問題ない。お前を正式な『  
守護』として任命しよう」

「ああ」

特に感情を見せずにいる鳴海を不満げに見上げる那智。  
そんな那智を無視し鳴海はトンネル内へと視線を向ける。

「美幸と陽向はあれでいいのか？」  
「問題ない。兎まがきの気配は消えた。一人ならば自力で帰れよう  
「なら良い」

そう告げると鳴海は霧散するかのようにその場から消え去る。

その様を見て忌々しげに舌打ちする那智。  
そして鳴海に続くかのように那智も消え去る。

後は何事も無かつたかの様に静寂が支配している。

今までの騒ぎが外界から隔離されていたかの様に…。

【第一羽了】

## 第一羽 血之誓

「鴉、だと？」

「はい、先日の昏頃に廃棄されたトンネル内で百目連が  
「有り得ねえ、都には一羽の鴉のみと『契約』で……」

「那智だ」

「那智？……ああ、あの帝の巫女。よもやあなた様から新しい男に  
乗り換えた、と」

「さも有りなん。あの女、今までの那智と比べて独占欲が強い事、  
俺が鴉を辞めてしまった時の顔をうぬらに見せておきたかったが、  
最早それも叶わぬ」

「新しい鴉、なかなかやりあるようで。九十九神を一撃で葬りまし  
て御座います」

「雑魚とは言えその力、捨て置けぬな。先代様、ぜひ私めに鴉の討  
伐を」

「抜け駆けすんじゃねえ。俺が鴉を殺る」

「あなた方が相手ならば新たな鴉様も荷が重いでしょ。や。わたく

しならば鴉様も退屈せぬかと」

「……この仕事、驕車に任せる。見事新しい鴉の首級を、先代である俺の眼前に据えてみせよ」

「承りました、かなりすや先代様の」期待に添えるよ(ヘ)……」

第一羽

血之誓【ちのうけい】

休日と言ひつので陽向と美幸は街に新しい服などの買い物に来ている。

しかし一人の顔はいまいち浮かない。  
昨日の出来事がまだ尾を引いている。

オカルト好きな陽向ですらあの出来事

重機で体を構成した訳の分からない生き物に襲われ、さらにコスプレみたいな妙な鎧を纏つた男の殺陣を見せ付けられ、一晩経つた今でも脳がパニクっている。

だが、それを顕著にしたのは美幸が呟いた一言。

仮面ライダー鶴に変身した男を『鳴海君』と呼んだことである。

近くのバーガーショップで休憩する二人。だが変わらずに沈痛な表情を浮かべている。

「…ねえ、美幸たん」

「なに…？」

恐る恐る。

傷口に触れないようにと陽向が口を開く。

「やつぱり、鳴海くんは  
「そんなわけ無い！」

大声を出し陽向の言葉を打ち消す美幸。

店内の人間がなんだなんだとこっちを見るが、美幸は気にしてはいられなかつた。

それほど心の余裕すら無かつた。

「そんなわけ……無い……」  
「美幸……」

皿らを抱きしめるような  
もしくはバラバラに碎け散りそうな自分を抑える為に自分の腕で自分を包み込む美幸。

その痛々しさから申し訳無さそうに俯く陽向を見て美幸は  
「「めん」と謝罪し、座った。

「でも、そんな訳は無いんだよ」  
「美幸、もつ……」  
「だつて……鳴海君は、あの時……」

ひしゃげた車体

吹き上がる炎

警察に引きずりられるドライバー

突き飛ばされて、地面に倒れ込む私  
包み込む様に、守るように寄り添う両親。

そして、

「これで良い」と

血溜まりに沈んで逝く鳴海君……。

「… も、美幸」

「…」

深い深い闇の記憶に沈みかけた思考を、陽向がサルページする。  
物思いから引き戻された美幸は呆けた返事を返す。

「まあ、考えても仕方ないよ」

「…うん」

「…ハ、こうときはー」

「…ハ、こうときは？」

「あつそびましょ」

「…ぱつと笑い手を差し出す陽向。

その様に苦笑し、美幸は照れくわざうしてその手を取った。

千代田区某所  
鳥丸神社

曇天の下に聳える鳥居の上で立ち尽くす少年少女がいる。  
渦中の鳴海と那智である。

「やつ言えば」

帽子を深く被り遠くの景色を遮断する鳴海に那智が話す。

「お前に教える事があつたのだ」  
「別に良い」  
「聞け。街の情勢だ」

東京には古来から『鴉』に護られている。  
しかし数年前、先代鴉が『鷺』（しらさぎ）を名乗り離反。人間に、  
東京に仇成し始めた。

妖怪が人間の欲望云々を指す『邪氣』に触れ、物理と化す『兎』に  
対処出来る存在がいなくなつていて。

「お前に白羽の矢が立てられた。『鷺』と『兎』の魔の手から東京を守るために」

「東京なぞどいつも良い」

鳴海は短く告げ、ポケットから写真を出す。そこには若干若い陽向と美幸、そして陰鬱そうな少年 鳴海が映っていた。

陽向が心底楽しそうな笑みを

美幸が困つてるようで嬉しそうな笑みを

鳴海が照れくさそうに、はにかんだ笑みを

それぞれがそれぞれの笑い方をしている。

それを慈しむかの様に眺め、大事そうにまたポケットへとしまい、帽子を深く被り鳴海は那智に向き直る。

「俺はただ、守りたいものだけを守れればそれで良い」

あの時、彼女を庇つた時

自らの体の全てが、猛スピードの車に打ち砕かれて逝くのがスロー  
で実感できた。

彼女を守る為に  
命を投げ出した。

だが、俺が死んだら誰が彼女を？

俺の様に狂信的に彼女を守るうとするやつなど居ない。

ならば、まだ死ねない。

血に沈んだとしても、まだ死んでなるものか。

チューブにつながれ、生命維持をされる。

これでも助からない。

俺はまだ死ねないのに。

「契約の時か？」

無表情だが、何か物思いをしていた鳴海にそつ問い合わせる那智。

鳴海はただ頷く。

「安心した。鴉として戦うこととは、そのままお前の望みに繋がる」

「偽りは、ないんだな」

「誓おう」

「…なら、良い」

「ただいまー」

「おかえりなさい」

遊び疲れた表情の美幸に母親が優しく出迎える。

そのままリビングに入った美幸はラックの上に飾られた写真を見る。

そこには美幸の両親、中心に美幸、左には背の高い青年、右には鳴海が写っていた。

鳴海はやはり同じくなくせむけない表情で写っている。

沈痛な面もちで写真を伏せる美幸。

その後ろ姿を静かに見つめる母親。

それに気付いた美幸は取り繕つよううに笑う。

だがそれが無理矢理に作った表情だと気が付いたらしく、母親はふつとため息を付き娘に近づく。

そしてふわりと美幸の頭に手を乗せ撫でる。

「…お母さん」

「早いよね。お兄ちゃんが死んで二年。鳴海くんがいなくなつて一年…か」

「うん……」

一年前

とある人身事故があつた。

ありふれた飲酒運転者のスピード違反。

巻き込まれたのは、美幸とその両親。

そして鳴海

だがどうさのところで鳴海は美幸とその両親を突き飛ばし、鳴海だけが暴走車に跳ねられた。

全身を複雑骨折している上に昏睡状態。

いづなれば半死半生の状態で鳴海は搬送された。

だが翌日、鳴海は病院を抜け出し行方不明となつてゐる。  
「鴉に会いに行く」との不可解な書き残しをして。

美幸は思つ。

あの時否定したが、やはりあの仮面ライダー鴉という存在は、鳴海  
なのでは無いのか?と。

ならばなぜ今まで行方を眩まし、なぜ今更現れたのか。

ただ其れだけが解らなかつた。

付けっぱなしのテレビの、緊急速報の音が五月蠅く響く。

『今日6時頃、都内環状線のトンネルで事故が発生しました。被害  
者の車体は何かに喰いちぎられた跡があり……』

PM5:49  
都内環状線 トンネル内

そこは正に煉獄。

破碎された車が轟々と燃え盛り、トンネル内を赤で埋め尽くしている。

炎の中には一体の車。

だが形は異形。

昆虫を思わせる流線型の丸い車体からは虫の様な腕が伸びており、車輪は鉄板を繋ぎ合させたかの様に「ゴツゴツ」としている。

車体の先には鬼を模した顔があり、その額には女性の体を模した機構が存在している。

女性型の機構は首を巡らし辺りの惨状を眺め、満足そうに目を細める。

鬼の口からは人間のモノと思われる足がはみ出でおり、鬼はそれに構わず口のものを咀嚼し続ける。

「今の時代の人間、誠に美味で御座います」

ふふふ、と身の毛がよだつような笑い声を挙げる女性型機構。

否、『魔車』。

不気味な笑い声が木靈するなか、不意にトンネル内に鈴の音が響く。

「…お出でになられましたね、鴉様」

血の誓によつ

己が内の三千世界の淵に沈みける鑑上

今、汝の  
「鳥」に  
「牙」を成せ。

響く祝詞。

不意に朧車は身構える。

感じ取つたのだ。

揺らめく炎の果てから『何か』が、何か途方もなく恐ろしいモノが来るのだと。

風を裂く音が

マフラーの爆音が響く。

「一.」

前方から一瞬の煌めきを感じ取り田を凝らす。

その数百メートル先にはバイクがこちらに向かい疾駆しているのが見えた。

鴉を思わせる流線型のフォルムに、羽のような装甲。漆黒の車体。

しかし運転手はおらず、座席にはむき身の刀がそのまま備えられていた。

「鴉様が居ない！」

隕車が叫ぶと同時にバイクが炎のカーテンを突き破り侵入する。

それに呆気に取られ動けない朧車。

次の瞬間、バイクは無数の羽根となり四散し  
中から拳を突き出す鴉が現れ、朧車の横つ面を思い切り殴りつける。

「ぎひー！」

すかさず鴉は腕の装甲から片刃の仕込みダガーを展開させ、腕を振り下ろす。

そしてそのまま鬼の右目を両断した。

地響きのような雄叫びと共に横合いから鴉を殴る朧車。  
ハンマーの様な、しなった腕の一撃は鴉を捉え壁に派手な粉塵を撒き散らしながら叩きつける。

「ぐう……せ、流石は鴉様、派手に人を喰らつておびきよせた甲斐がありました！」

苦しげにうめく朧車を尻目に、瓦礫と粉塵から顔をだす鴉。

不意に刀の柄から鎖を引き出し、朧車へと投げる。

鎖は光のうねりとなり、一瞬で朧車を雁字搦めにする。

そして刀を杭にするかの様に地面に突き立てた鴉は、柄を足場にし

高く飛び上がる。

「な、何を！」

何か恐ろしい技が来ると本能で惣の驥車。  
しかし逃げることは叶わない。  
もがけどもがけど鎖は絡まるばかり。

空中の駒は翼を開ける。  
その様はさながら墮天使。

そしてそのまま、羽ばたきキックの体制をとる。

『ハアアアアアアーツ！』

雄叫びとともに驥車へと突進する駒。  
翼は足へと絡みつき、黒い鎌<sup>やじり</sup>と化す。

音速のスピードのそれは過たず鬼の眉間。

鬼の顔と朧車の腹部を貫く。

一瞬で体を分断され、穴を穿たれた朧車は断末魔をあげる事無く派手に爆散した。

畳んだ羽をマントの様にたなびかせる鴉。

そしてその様を離れた場所から見つめる那智。

興奮した面もちで、右親指の爪をかじりこみ、陶酔したかの様な表情を浮かべる。

「ああ、流石だ。」

素晴らしいぞ鳴海。

今度こそ私の鴉！

私だけの鴉！



## 第三羽 逢魔刻

「驪車、敗れまして、」ぞこます」

「ぞまあねえな。先代様もこの牛頭に任せていればこんな事にはならなかつたのによ」

「口を慎め牛頭。…して、如何致しますか先代様」

「牛頭には特別任務を任せる。今から云う女を攫つて来い。だが殺すなよ。鴉をおびきよせる餌だ」

「任された。…しかし都の戦闘機械である鴉が女一人で来るものか？」

「ふ。鴉の弱点は鴉にしか解らぬ。…ましてや今の鴉は俺とは只ならぬ仲。俺のは兎も角、あやつの弱みなど既に知り尽くしておる」

「…ああ、確かに」

「以津真天、<sup>いつまで</sup>鴉を出来るだけ引き付けよ。場合によつては倒しても構わぬ」

「御意」

### 第三羽

『逢魔刻』（おつまがとき）

### 商店街

夕方に差し掛かってきたのか、帰路に着く人間や夕飯の買い出しに来る人間に溢れたそこに鳴海と那智は居た。

鳴海はケーキ屋のショーウィンドウにへばりつき、中のショートケーキを眺めている。

かなり異様だ。

だがその様を咎める人間は居ない。

道行く通行人はおろか、店主でさえも。

「無駄だ」

那智が鳴海に鋭く諭す。

鳴海は無表情だが残念そうにその場から立ち上がる。

「我々は思念体。言わば幽霊や妖怪と同義。人間の理はもはや通用せぬ」

鴉になる。

そう書き置きして失踪した鳴海は鳥丸神社へと向かった。

古の伝承。

物理を抜け出し、永遠に都を守る鴉となつて美幸が天寿を全うするまで陰から守る為に。

鳴海は鳥丸神社の参拝道で息絶えた。

そして、その魂を那智が見つけ『鴉』と化した。

『契約だ。お前は都を守る永劫の従僕となる。その不自由と引き換えに、お前の望みを叶えてやる』

： 望み

「俺の、望みは……。」

『ある一部の人間達を、優先して守る。都は一の次だ』

『法外だが、構わん。血の誓は護られる。鴉として生きる代わりにその望み、叶えてやるつ』

死して人は鴉になる。

つまり鳴海は、名義的に死んでいる。

立ち尽くす鳴海をサラリーマンの群れがすり抜けてゆく。

そしてそのサラリーマンの群れを妖怪の群れがすり抜けてゆく。

「鳴海よ、彼らもまた鴉の護るべきモノだ」

東京は遙か昔、とある母神が死したのちは混沌の大湿原だった。数多の支配者は妖怪の呪力を用いてこの東京の地を人が住めるまでにした。

だが超自然的存在である妖怪は人間の都市開発などに影響を受け、段々と悪しき存在へと変貌していった。

それこそ『兎』

「鷺はその中でも力のある兎を集め、何かを囮論んでいる。お前が昨日討伐した驥車もその一匹だ」

「関係無い。奴らが現れたら殺して終わりだ」

「お前は…少しばかりは私の言葉に関心を…」

那智の文句を中断させる形で鳴海は影へと消える。

その様をかなり苛立たしく、恋い焦がれるような表情で見つめる那智。

「何故だ…！鷺は私のモノなのに！なぜ鷺は私に…！」

学校内

美幸はいつものように陽向がオカルト雑誌を見ているのを静かに眺めている。

時折

「ほほう」とか

「ふへー」とか陽向が奇声をあげるのが気になるが。

「……美幸美幸！」

「なに？」

「これ！」

突如あわてふためく陽向の様に少し吃驚する美幸。

陽向が見せてくれた記事を訝しげに見る。

『都内に蠢く怪物の群れ！そしてその間に飛ぶ謎の人物！』

【古来から東京には不可思議な出来事が日常茶飯事だが、最近はより顕著だ。とくに三年前からは奇怪な生物が多数目撃されており、その生物による事故や死傷者がうなぎ登りになつていて。そんな中、時折黒い鎧を纏う謎の人物が目撃されており……】

「これ……」

「あの仮面ライダー鴉、つてやつだよね」

食い入るように記事を見る一人。

自分たち以外にもあんな不可思議な体験をした人間が多数いるのだと言つのだから。

それよりも美幸は

「三年前」というくだけに釘付けになっていた。

『三年前

確かに兄さんが死んだ年だ。』

何故か関係有るよつに勘ぐる美幸。

杞憂に終わればいいと心から願つている。

浮かない表情を浮かべ始めた美幸を案じ、半ば無理矢理に雑誌を閉じる陽向。

美幸はその様に少し驚いたものの、陽向の真意をすぐに理解し

「ありがとう」と言った。

不意に教室内が騒がしくなる。

男子が窓の外を見て騒ぎ立てている。

「でか！」

「あんた鳥東京にもいたんだなー」

「お、こっち来るー」

美幸と陽向が外を見ると鳥が近づくのが見える。  
確かに周囲の物と比較すれば大きい。

否、大きすぎるー

猛スピードで向かうそれは失速することなくそのまま教室へ突っ込み、瓦礫とともに生徒の大半を吹き飛ばす。

『さやあああー！』

教室の隅にいたために二人は直撃を免れたが、その為突っ込んできた鳥の化け物 以津真天に気付かれる。

鋼の体躯と、その両端につけられたジャイロ機構からは翼のようこ  
鉄板が折り重なり生えている。

顔は鳥のものではなく、どくろを模した鉄板面が備え付けられてい  
る。

冷水をかけられたかのように身震いする一人を嘲るように以津真天は見つめる。

「ふ、やはり居たか。…」いやつらは良いとして、鴉をおびきよせるために何人か喰らうとするか

のそりのそりと倒れ込む生徒達に近づく以津真天。  
どうやら奇跡的に皆生きているらしいが、以津真天がそばに居る以上助かつた訳ではない。

腰が抜けてしまった一人は悔しげにその様を見つめる。

不意に以津真天が開けた穴から黒い影が矢のように飛び込む。

その影から伸びた一閃を鉄の翼で防ぐ以津真天。  
そこには節々を鎖で繋いだ黒い鎧。

『鴉！』

美幸と陽向が同時に叫び、鴉は一瞬だけ一人を見る。  
以津真天は鴉を弾き飛ばし、ジャイロを回転させる。

ジャイロから巻き起こる突風が瓦礫を吹き飛ばし視界を悪化させる  
中、以津真天は天井を突き破り上へと飛ぶ。  
鴉もそれに続こうと身構える

が、

「鳴海君！」

美幸が鴉に叫ぶ。  
切なそうな表情で。

鴉は

鳴海は首だけを巡らせ、美幸を一瞬だけ見つめ、以津真天の空けた  
穴へとジャンプする。

「美幸……」

「あれは、鳴海君だった。間違いなく」

美幸の脳裏に焼き付いている幼い記憶。

鳴海と交わした約束を思い出し、涙を流す美幸を陽向は眺めていた。

眺めるしか、出来なかつた。

屋上

対峙しあう以津真天と鴉。  
お互い静止画の様にピクリとも動かない。  
凍りついたかのような時間が過ぎてゆくなか、不意に以津真天が口

を開く。

「鴉、何故邪魔立てする。我らは先代 いや、鷺様と共に素晴らしい計画の為に動いていると云うのに『関係無い』

言葉もそこそこに、逆手に構えた刀で斬りかかる鴉。

袈裟掛けに放つた一撃をひらりと避けつつ以津真天は話し続ける。

「とにかく世界には下らぬ人間が多い。偽善者、欺瞞傲慢に高ぶる愚者、盗人猛々しい馬鹿者…。鷺様はそれに絶望し、我等を選んだ。選ばれし人間のみを生かし、それ以外の人間を家畜とすることに…」

以津真天の足が鴉の刀を受け止める。

ガキッと言う金属音と共にピクリとも動かせなくなつた刀をガチャガチャと鳴らしながらもがく鴉に、以津真天は顔を近付ける。

「お前が降伏すれば、私から鷺様に『お前とお前の縁のあるものどもだけ』を生かしてやっても良いように取り計らうが…如何かね?」

囁きを振り払うかのように刀を払い、以津真天との距離を置き刀を水平に構える鴉。

「馬鹿め」と以津真天ではつぶやき、鴉へと突進する。

「美幸！とにかく逃げよ！」

「う、うん！」

漸く腰が抜けた情報から脱出した一人は、救助を呼ぶためにその場から離れようと試みる。

しかし

「きやあああ！」

「美幸っ！」

突如美幸の足元が陥没し、美幸は足元の間に飲み込まれるように消えてゆく。

その直後、破碎音と振動が陽向を襲う。

外を見れば、美幸を小脇に抱えた牛の頭を持つ化け物が彼方へ走り去るのが見える。

「美幸…つー美幸イイーツー！」

陽向の叫び虚しく、美幸はそのまま彼方へと消え去ってしまった。

【第三羽 了】

## 第四羽 愛憎（前書き）

親が死んだ。

俺は独りになつた。

美幸と名乗った女は  
俺の手をとつた。

「君は独りじゃないよ」

彼女の親は俺を暖かく迎えてくれて、彼女の兄は俺を可愛がつてくれた。

彼女は、俺の望む世界を与えてくれた。

彼女の兄が死んだ。  
彼女は泣いていた。

「泣かないで」

君を護るから

もつ優しく君が泣かないよ。君  
哀しまないよ。

あの時の優しさを

誓おう。

君を守り続ける。

第四羽

【みじめ】 愛戀

以津真天の一撃をまともに喰らい、そのまま空に打ち上げられる鴉。身動きとれぬまま、以津真天の爪に掘まれ虚空へと共に飛ばされる。

空に投げ出される間、鴉は学校の壁を突き破り街の彼方へ走る物体を見つけ出した。

恐らくは兎。

だが鴉の視点はそこではなく、その兎の脇に抱えられた美幸にあつた。

『美幸イイツ！』

もがく鴉をしつかりと握りしめる以津真天。伸ばせど届かぬ手を伸ばし続ける鴉を嘲るかのように笑い飛ばす。

「滑稽だな都の守護よ…それほどまでにあの女が大事か！」

耳をつんざくような以津真天の笑い声に業を煮やす鴉。何とか両手を出し、印を結ぶ。

すると鴉の体は発光し、そのち勢い良く回転する何かへと変化する。

「ぬおおつー？」

切り刻まれた手を離す以津真天。  
やがて回転の止んだそれは姿を表した。

中心から四方に伸びた鋭利な三角の刃。  
見た目で言えば、鴉は手裏剣へと変化したのだ。

そのまま勢い良く回転し、美幸を抱える化け物へと飛来する鴉。

だが以津真天は追わず、そのまま虚空で待機している。  
心なしか歪んだ、醜悪な笑みを浮かべて。

車や通行人を牽きながら道路を行く牛の化け物。

機械的な牛の頭部にカタツムリのような曲線を描く背中から生えた  
腕は小さくひょろりとしている。

しかし足はあるでキャタピラの様に仰々しく、牽き潰した人間の血  
により赤い線がついている。

脇には美幸がぐつたりとした様子で抱えられており、気絶している  
のか周りの状況に何の反応も示さない。

「ん？」

シュルルと音を立てる空気を裂く音に反応し振り返る牛の化け物　牛頭。  
後ろからは縦に飛来する回転物、恐らくは鴉と判断した牛頭は舌打ちをする。

「以津真天め！足止めしどけと言われただろうが！」

鴉は手裏剣型から発光し、一瞬でバイク型に変化すると牛頭のあとを追い始めた。

巨大に似合わず器用にドリフトを駆使したり、巨大に見合うように道行く人を跳ねたり建造物を破壊しながら逃げる牛頭に必死に食らいつく鴉。

これだけ激しいチエイスを繰り広げていると言つのに起きる素振りを見せない美幸。

不意に鴉から鎖が放たれ、牛頭の体へと打ち込まれる。  
それに気づかずにドリフトを繰り返す牛頭。

急な方向転換に鴉は振り回され、ビルや壁に叩き付けられ、破壊してゆく。

『おおおつー』

強引に鎖をたどり寄せ、牛頭の頭へと着地する鴉。  
そのまま力一杯に背中へと刀を突き刺す。

「ぬおつー？」

漸く気付いた牛頭はバランスを崩し、派手に横転する。  
その寸前に鴉は美幸を抱え、着地する。

牛頭はそのまま歩道橋の下まで土煙を上げながら滑つて行く。

「う…んつ  
『…』

鴉の腕の中で目覚める美幸。

目の前に鴉 鳴海が居て大きく眼を見開く。

その眼越しに移る自らの顔から鴉は顔を逸らした。

「鳴海、君」

『……久しぶりだな、美幸』

隠すことも無いと、そのまま美幸に応える鴉。  
美幸は感極まつたといった表情で鴉に抱きつく。

抱きついた拍子に鴉の節々に巻かれた鎖が力チャリと鳴る。

「なんで…居なくなっちゃったの…？なんで兄さんみたく居なくな  
りうとしたの…？」

『……俺は…』

死に瀕したこと

死して鴉と化したことは言えなかつた。

何より美幸と言つ未練の為にこの世に迷う『靈』として存在として  
認識されるのが、兎に角怖かつた。

押し黙る鴉にすがる様に見つめる美幸。

その視線に堪えきれず顔を逸らし、立ち上がる鴉。

『兎に角』から離れよ。『』は危険だ

「つ、うん」

美幸の手を引き此処から離れよとする鴉と美幸。

すると足元に鋭利な刃物が突き刺される。  
氣で作られたものだ。

『どこへ行く？鴉よ』

不意に響く声。

鴉と美幸が上を見上げれば、そこには

「白い……」

『鴉……』

白に染められた鴉の鎧を纏う男が居た。

しかし鳴海の鎧とは違ひ節々に巻かれた鎖は無い。

『貴様、鷺か』

『如何にも。初めまして鴉。そして久しぶりだな、鳴海よ』

『！』

白らの名を言われ狼狽する鴉。

鷺はふつ。と短く笑えば白らの変身を解く。

『……碎羽』

『兄さん……』

そこに居るのは白いコートを纏つ男。

紛れもなく美幸の兄だった。

『何故…』

「人は死して鴉と成る。それはお前も知っているだろ？鳴海」

鴉の秘密を聞き、信じられないと言う表情を浮かべる美幸。  
失踪した鳴海は生きていたと言う希望を否定されてしまったのだ。

『…碎羽さん、なぜ離反を、なぜ兎を用いた…』

鴉の問いに含み笑いをあげる碎羽。  
やがて印を切り、また白い鴉  
否、鷺へと変身する。

『その謎、後で語つてやろう。存分にな！』

白い疾風で化し肉迫する鷺。

鴉は防御体制を取るが、鷺は鴉の横を通過し

「きやあああ…」

『美幸いつ！』

鷺はそのまま美幸を抱え、空に浮かんでいる。

「兄つ…さん…」

『俺が死ぬる一年前、お前が父母に拾われてからずっと美幸に恋い焦がれていたこと、俺が解らぬとでも思つてか』

美幸の頬に鷺の装甲の爪が食い込み、血を垂らす。  
痛みと恐怖、そして兄への様々な思いから涙を流す美幸を見せつけられ鴉は激昂する。

『彼女を離せ碎羽！貴様の妹だろう！』

『我が妹故によ、せめて我が大願を見せてやるためにわざわざ生かしてあるのだ』

『貴様アアツ！』

飛びかかる鴉。

そのまま横に刀を払うが、鷺の手に握られた刀に遮られ空中で餛飩り合いとなってしまう。

『ふはは、都の守護が一人の女にいきり立つたとはな

『黙れ！貴様は斬る！』

距離を取り、刀を構え直す鴉。

しかし節々の鎖が鈍く輝き、動きを止めさせる。

『止めよ鴉』

『那智！止めるな！』

信号機の上には那智が存在していた。

鷺は去るわけでもなく、ただその場を美幸とともに静観している。最も美幸は恐慌状態にあり、まともな静観していなが。

「鴉、彼女よりも先に以津真天と牛頭を駆逐しろ。鷺も命を保証しておるのだ」

『信用出来ない！それより美幸だ！』

『ならぬ！私の言つことを聞け鴉！』

『嫌だ。美幸を第一にすると言つたはずだ。それが誓の筈だ』

鴉の反論に肩を震わせる那智。

顔を俯かせた那智からは邪気が漂い始める。

「何故だ…何故私よりその女を！何故だ鴉！何故私を第一に考えない！」

『…那智？』

ヒステリックな叫びをあげ頭を抱えこむ那智。  
その背中からいきなり一本の腕が生える。

『…』

その様を見た鷺はそつと鴉に耳打ちしてやる。

『那智とはな、帝と鴉の橋渡しを務める聖靈。言わば妖怪の上位種だ。そして兎は妖怪が悪しき氣に触れて変化するもの』

大体那智とはあんな存在では無く、機械的な存在だった。  
俺が三年前、鴉と化したあの時もな。

しかし四六時中愛を囁いた内にああなつてしまつてな、俺が鴉を止めたときのあの表情と言つたら…思わず股ぐらがいきり立ちそうになつたぞ。

【ああああああああああああああああああああああああ】

段々と装甲に包まれ、また一本の腕を生やした那智。  
複眼を模したパイザーと、頬から生えた牙の機構を見れば、蜘蛛そのものだった。

【カラス！カラスカラスカラスカラスカラスカラス！】

怒りを、愛しさを露わにして狂つた人形の様に叫ぶ那智

否、女郎蜘蛛に向かい刀を向ける鴉。

躊躇いは無い。

振り降ろされた女郎蜘蛛の腕を逆袈裟に断ち切り、脳天に垂直に刃を振り下ろす。

その筈だった。

しかし紙一重で刃が止まる。

鴉が、止めを刺すのをためらつ。

女郎蜘蛛はそのまま両腕で鴉を捕まえ、胸元に引き寄せる。  
そのまま抱きかかえられ、女郎蜘蛛の胸元で足搔く鴉の頭に声が降  
り注ぐ。

【鴉は私だ！私のモノだ！でなければ私は永遠に独りきりになつて  
しまつ……】

都の守護神の巫女として何代も生き長らえた少女にとって鴉は唯一  
の隣人。

それを奪われるのは耐えきれないほどの中の苦痛。

鴉は思つた。

那智は俺と同じなのだと。

喪うのを何よりも畏れる存在なのだと。  
だからあれほどに嬌柔や屈服を求めたのだと。

だからこそ。

鴉は手裏剣と化し、自らを包む女郎蜘蛛の両手を切り裂く。

女郎蜘蛛の悲鳴が響き渡る中、鴉は距離を取りバイクへ変化しマフラーを蒸かす。

「ヂヂヂヂヂ」と爆音が響き渡り、女郎蜘蛛が突進していくのを見計らい、急発進する。

スピードの乗ったバイクは弾丸の「」とく女郎蜘蛛にぶつかり、女郎蜘蛛の巨体を後方に吹き飛ばす。

鴉はその巨体に鎖を巻きつけ、後方に吹き飛ぶ勢いで一気に距離をつめる。

『ハアアアアアーッ！』

逆手に持つた刀で一閃。

綺麗に決まった一撃により女郎蜘蛛の体は上半身と下半身に分断される。

上半身の装甲が剥がれ落ち、裸体の那智が投げ出される。

それを瞬時に攫う白い影。

「やあああつー。」

『美幸つー。』

鷺が美幸を投げ出し、那智を抱きかかえる。

投げ出された美幸は真っ直ぐ鴉に飛来し、鴉をクッシュョンにし地面へと落ちる。

「いたた…。鳴海君、大丈夫？」

『ああ。美幸は怪我無いか？』

頷く美幸を見、空中に浮かぶ鷺を睨む鴉。

鷺の腕に抱かれた那智は死んだかの様に動かない。

『死してはおらぬよ。那智はそういう存在だからな』

鴉の気持ちを読んだかのように鷺は語る。

そして那智の髪を愛おしげに撫でる。

不意に鴉の腹部からピシリとひび割れる音が鳴る。

鴉が腹部を覗けば、ベルトのバックルにひびが入っている。

ひびは次第に大きくなり、遂にはバックル全体に伸びる。

そして。

パキイイン

軽い破碎音と共にバツクルは碎け散り、鴉の鎧も黒い塵となり風に吹かれた。

「…」

フハハハハ！と高笑いをする鷺を睨み付ける鳴海。いつの間にか背後には以津真天が控えている。

『鴉は那智あつて始めて変身出来るもの。その那智は遂にし方お前が殺したばかりだ。…まあ死したのは肉体と精神のみ、魂あらば直に蘇るがな』

「だがそれはさせぬ。新たな那智の意識が復活する間に、東京を滅ぼしてくれるわ！」

美幸を庇つよう身構えている鳴海。

鴉に変身出来ない今、鷺と以津真天を相手にしても無駄死にするだけだ。

「たつた一匹で何が出来る？いくら兎と元鴉と言えど、東京にある武力にかなうものか」

鳴海がやつと言えばまたも鶯は高笑いをする。

そして以津真天に那智を託し、一人をいづこかへと飛び去らせる。

「鳴海よ。東京には黄泉比良坂よつひらさかと云つ場所が有るのだ」

「……？」

嘗てこの地を開闢した父神が、喪つた伴侶を探し求めたり着いた場所。

現世（うつしよへいのよ）と幽世（かくじよへあのよ）を分かつ門こそ黄泉比良坂。

しかし、中は死靈の巣窟。

父神の愛しき伴侶も死靈と成り果てた。

あまりのおぞましさに父神は命からがら黄泉比良坂を閉じ、永劫に封じた。

『俺の望みはな、閉ざされた黄泉比良坂を再び開け放ち、死靈を蹂躪させ東京を無に返すこと!』

「何故だ」

『我が愛しき那智を、東京と鴉の巫女みこと云つ呪縛から解き放つためだ』

鶯から返ってきたものは意外な返事だった。

「な……に？」

『三年前、病魔で死した俺は那智と出会い鴉となつた。最初は東京を守るといつ重圧に耐えきれず、だが死して消滅するのも堪えきれず……』

抜け殻の如くあつた俺を癒やしたのは那智だ。

ひたむきに都を守らんとするその心。

無機質ながら都に生きる総てへ向ける慈しみ。

段々と惹かれた俺は那智に愛を囁いた。  
無駄だと知りながら、四六時中囁いた。

那智は愛してくれた。

だがそれは『碎刃』としての俺ではない！『鴉』としての俺をだ！

『なれば那智を暫し眠らせ呪縛の元である東京を滅ぼせば、後は如何様にでもなろう！』

「馬鹿な。狂つてる」

『貴様が云うか。我が妹を狂愛している貴様が』

押し黙る鳴海。

確かに鷺は、自らだ。

ただ愛する人間の為なら、いくらの犠牲が出ても構わない。

愛するために憎しみを生み出す。  
憎しみの上に愛を咲かせる。

不意に前方から牛頭が急接近してくれる。

「美幸！」  
「いやあっ！」

美幸を抱きかかえ、横に転がる鳴海。

紙一重の距離だったため、鳴海のコートの裾が破れる。

『牛頭よ！鴉とその女を喰らえ』

非情な命令を下した鷲は、以津真天が飛んだ方向。すなわち黄泉比良坂へと飛び去る。

追おうとした鳴海達の前には牛頭。  
唇の端を吊り上げる牛頭にたじろぐ鳴海。

「鴉の力無くして、俺に勝てるかあ？鴉！」

【第四羽 了】

## 第五羽 再覚醒

黄泉比良坂

日本橋の下に立てられたその門に控えるは以津真天。  
足には一糸纏わぬ那智が。

そしてそこに降り立つ鷲。  
刀を抜き放ち、門前にて構える。

『以津真天、呪言を』  
「御意」

すると以津真天は天高く飛び上がり、おどろおどろしい声で  
「いつまで、いつまで」と鳴き始めた。

以津真天とは元々、粗雑に葬られた動物の怨念が鳥に宿り、人の顔  
を成し葬儀を執り行わせるよう鳴き続ける妖怪。

それは一種の催眠術であり、死者にも作用する。

『さあ来やれ黄泉の醜き亡者共！うぬらが憎きハレの民を皆殺しに

せよー身腐りの「ぬら」を以て、ハレの都である東京をケガレで埋め  
『勿くせー』

門に向かい、刀を振り被る鷺。

刀には赤紫の気が宿り、妖しく鳴動する。

『ケエニニニツー』

袈裟掛けに刀を振り放つ鷺。

門のスリットに刃が食い込み、裂断する。

切り口からは障気が噴出し、まがまがしい「めき声」が辺りに満ちる。  
刀には赤紫の気が宿り、妖しく鳴動する。

『ケエニニニツー』

袈裟掛けに刀を振り放つ鷺。

門のスリットに刃が食い込み、裂断する。

切り口からは障気が噴出し、まがまがしい「めき声」が辺りに満ちる。

「ドドド」と重苦しい音が響き門が開く。  
中から黒い氣流

亡者の群れが我先にと現世へ吹き出して行く。

街はあつと叫び間に死靈に埋め尽くされ、老若男女畜生問わず死靈に蹂躪されてゆく。

その様を黄泉比良坂から悦に入ったような声をあげて眺める鷺。

『そ�だ！もつと混沌を！もつと殺戮を！殺して祀つて戒めて、我に那智を捧げるのだ！』

刀を振るい、指揮をするかのように死靈を操る鷺。

以津真天はたじしつかりと那智を持ち、そばに控えている。

那智の体が僅かに動いたのも知らずに。

スクランブル交差点で牛頭と対峙する鳴海と美幸。

牛頭は気持ちの悪い笑い声を上げて鳴海を見下げる。

不意に牛頭のカタツムリのような背中が展開し、馬の頭があらわれる。

牛の頭は右肩に移動し、背中を包んでいた装甲は左手の盾となる。

馬の頭は左肩に移動し、牛の頭と馬の頭との境目から、鬼の頭が現

れる。

【これが我が正体！黄泉の国の獄卒！牛頭と馬頭！】

牛頭馬頭は盾で鳴海に殴りかかる。

盾の直撃した鳴海は逆流した胃液を盛大に撒き散らし天高く舞い上がる。

そして打ち上げられた鳴海の腹部に、牛頭の右手が突き刺さる。

「ぐほつ！」

「嫌ああああああ鳴海君つ！」

美幸の叫び声が響くなか、牛頭馬頭は鳴海を地面に叩きつける。

しかし鳴海はふらつきながらも立ち上がり、尚も立ち向かおうとする。

【流石は鴉！しかし何時までもつかな？】

嘲笑を受けても尚、退こうとしない鳴海  
しかし

「美幸つー！」

予想外の方向から声がする。

それは学校から走ってきた陽向だつた。

しかし瓦礫が死角になつてか、陽向は鳴海や美幸に気付いても牛頭馬頭には気付いていない。

「やつぱり鳴海くんだつたんだ！ 積もる話はあるんだけど」

「陽向つ！」

不用意に瓦礫の陰から飛び出した陽向は、鳴海の叫び声と、その鳴海の腹部からの出血に吃驚し、脚を止めてしまつ。

【なんだ貴様あああー】

「ひつ…」

陽向に振り下ろされる牛頭馬頭の盾。

鳴海は間一髪、陽向を突き飛ばす。

鳴海の右半分は、盾に擦り下ろされ派手に血をまき散らせる。

「あ…ああ…」

「なる…みくん」

呆然とする一人と

高らかに嘲笑う牛頭馬頭を上に

鳴海は血溜まりに沈んでいった。

一年前の様に。

なぜ思念体の自分が血を流すのか不思議だ。

それはまだ人間でいたいという未練の表れなのか。

人を捨てていかない名残なのか。

一年前の、血と後悔に沈んで消えた時の残滓なのか。

ああ

もう、どうでも良い。

そこは、虚数空間だ。

凹も凸もない、白い一面のみの空間。

鳴海は座る。

外界との関わりを断つかのよつて、身を丸めて。

不意に声が響く。

【なぜ護る?】

あの時約束した  
護ると。  
哀しませはしないと。

【本当は?】

本当は独りになりたくないつた。  
折角彼女が与えてくれた繋がりを、彼女を失うことで孤独になつた  
くなつた。

とどのつまり

自分の為に彼女を護つていた。

【だから彼女は泣いていた】

そうだ

彼女を護る訳ではなかつたから。  
自分が身を削るたび、彼女を哀しませていた。

【なら、真に彼女を護れ】

真に？

どうやれと？

不意に鳴海の目の前には美幸が  
それに次ぎ陽向、美幸の両親、クラスメートと次々と現れる。

さながら小規模な東京のように人が人を現せている。

「真に、護る」

復唱する鳴海。

彼女が望むのは何だつたのか？  
自らの安全でもなく。

鳴海の果てしない戦いでもなく。

ただ、自らと、自らと関わりあう人々と平和に暮らすこと。

それが

「そりなんだな」

目の前の美幸は頷いた。

黄泉比良坂

「ぬつ！？」

以津真天は漸く違和感に気付いた。  
那智の発光が激しくなつてゐる。

心臓のように一定の感覚を置き、点滅を繰り返す。

やがて那智は無数の靈魂と化し、以津真天の足をすり抜ける。

「なつ！」  
『那智！』

鷺は手を伸ばし、靈魂のひとつを掴むつゝあるも届かずこ、靈魂は束となり東京へと向かう。

『…那智いいつ！』

鷺は唸り声を挙げる。

恨めしげに彼方へ飛散した那智を睨みながら。

渦巻く死靈が街を覆つ中、牛頭馬頭は美幸と陽向、血溜まりに沈む鳴海に詰め寄る。

【もう鷺は死んだ。諦めて俺の腹の内に收まれ！】

キッと涙の滴を眼から垂らし、牛頭馬頭を睨みつける美幸。負けじと陽向も睨む。

せめて目力では負けないようとにかく睨む一人だが、牛頭馬頭と後ろに渦巻く死靈たちを見続けるのは、やはり怖い。

力タ力タと震える体をいきり立たせて、鳴海の前に立ちはだかる。

牛頭馬頭は興ざめと言わんばかりにため息をつけば、右手を振り上げる。

その刹那、彼方から那智の靈魂が飛来し死靈たちを裂く。

【な、なんだ!】

「今度はなにー！？」

うろたえる牛頭馬頭と陽向を尻目に、美幸は靈魂をなんとはなしに何なのか悟り、体を差し出すように両手を広げる。

靈魂はそれに承知したかのよう美幸の体を貫く。

「美幸つ！？」

陽向が心配そうに声を荒げるが、美幸は表情を変えず、寧ろ心地よさそうな顔をしている。

淡い緑の光に包まれた美幸の髪が、一瞬にして伸びる。それはさながら

【那智】

美幸は薄く口を開き、祝詞を唱える。

「己が内の二十世界の淵に沈みけん鑑よ。

今汝の

【セセセルカアアアー】

美幸に向かつて盾を突き出す牛頭馬頭。  
しかし

「鳴海君」

不意に血溜まりから起きた鳴海により受け止められる。  
右半分が無くなつたと言つのこと、どういう力をしているのかと聞きたくなるぐらいいの力で、盾はピクリとも動かない。

「美幸、那智」

美幸の内にいる存在に気付いているのか、鳴海は一人の少女の名を呼ぶ。

「俺は分かつた気がする。」

何が、と問わずただ微笑む美幸。  
そして後ろから鳴海を抱き締める。

そして、美幸から那智の表情へと変わり、凛と言い放つ。

「往け、鴉！」

鳴海の眼が大きく見開かれる。

東京中のカラスが集まり、死靈の群れを瞬く間に食らいつくし、空を彩る。

あらゆる場所に梵字が浮かび、スクランブル交差点を中心に曼陀羅を描く。

「はあああーっ！」

鳴海の雄叫びに呼応し、曼陀羅が輝き牛頭馬頭を弾き飛ばす。

【うおおおっ！？】

巨大が木の葉の様に宙に舞う。

地面に叩きつけられた時には、光は止んでいた。

交差点には、しゃがみ込む黒い鎧。

節々に巻かれた鎖は碎け散つていた。

まるでしがらみから解き放たれたかの様に。

眼は金に輝き、鎧の縁は銀に彩られている。

ベルトのバックルはカラスが翼を広げたものとなつており、神々しい金に輝いている。

鎧が右手を掲げたと同時に、彼方から飛来してきた鎧びた刀が手に収まる。

一瞬の発光の後、鎧びた刀は真の姿を表す。

両刃で反りの激しい太刀

嘗て神の使いが天皇に差し与え、今も皇族に伝わる名刀。

小鳥丸

「来た来た来たー！」

嬉しそうにはしゃぐ陽向に、無言で寄り添う美幸。

鎧は小鳥丸を手に、剣舞を舞い始める。

それは流麗かつ美麗。

剣を払う度に空の死靈は払われ、光が戻る。

鎧が夕暮れ時の陽光を浴び、舞う様はまさに

暁の出陣 ！

【莫迦な…！】

狼狽える牛頭馬頭の前で剣舞を終えた鎧は、水平に刀を構える。

都の守護

牙を成す鳥。

『仮面ライダー鴉、推参』

【第五羽 了】

## 第五羽 再覚醒（後書き）

### 第五羽

再覚醒（Re:birth）

## 最終羽 鴉

曇天の如く空を覆い尽くしていたカラスと死靈が消え去り、暁の光に照らされたカラスの羽根が舞い散る中で対峙する牛頭馬頭と仮面ライダー鴉。

そしてその様を見つめる陽向と、那智の魂が宿つた美幸。

牛頭馬頭は膠着状態から抜け出そうと、盾を振りうつとする が

『破つ！』

【ぐふえつ！】

それよりも速く、鴉の拳が牛頭馬頭の顔を殴打する。

続いて体全体に鴉が神速の速さで拳を叩き込む。

叩き込む度に牛頭馬頭の体が風に吹かれた柳の様に大きくしなる。

殴る

さらに殴る。

爆音の様に響く音から、相当な威力を持つことを簡単に予想させる重い拳のラッシュを叩き込み、装甲の九割を削り取られた牛頭馬頭

は大きくふりつぐ。

鴉は大きくジャンプし、体を回転させかかと落としを放つ。

ビュッ！と大気を裂く鋭い蹴りは、過たず巨大な化け物を両断し、化け物の残滓を辺りに撒き散らした。

断末魔の悲鳴を漏らす暇も無く瓦礫と化した牛頭馬頭の前に佇む鴉。鷺の飛び去った方向

黄泉比良坂の方角へと向き直る。

「私達も行くよ」

急な提案を振りかけた美幸に振り返る鴉。

その鴉の肩装甲を陽向が叩く。

「除け者にしないでよね。あたしら一年前から置いてきぼり喰らつたままなんだから」

「それ以前に私は那智の魂が宿つたんだから、戦いを見届けなきや」

やがて鴉は静かに頷き、身をバイクへ変化させる。

『乗れ』と短く告げ、搭乗席にむき身で晒した刀をサイドに移動させる。

美幸と陽向が座席に乗ったのを確認し、バイクは急発進した。

目指すは黄泉比良坂  
以津真天と、鷺。

最終羽

【鷺】 KARAS

黄泉比良坂

開け放たれた門の『内側』は暗く、湿った、生温い風が絶えず流れ  
てくる。

その前に佇む以津真天に刀を向ける鷺。

以津真天は微動だにせずそれを直視する。

「鷺が真の覚醒を果たした」

「らしいですな。私めにも分かりまする」

「対抗するに当たり、貴様の命を貰いたい」

「は。この以津真天の命、存分にお使いづぶし下され」

刀を以津真天の喉へ突き刺す。

以津真天はぐぐもつた悲鳴と共に朽ちてゆく。

朽ちた躯から出た魂を取り込んだ鷲は、己の体を変化させる。武者を思わせる鱗垂と兜を纏う姿となつた鷲は前方を見据える。

遙か前方からは美幸と陽向を乗せて迫る鴉。

鷲の一の腕が装甲ごと隆起する。

一回りも一回りも大きくなつた鷲から手裏剣が放たれる。

ボッ！と空気の壁を突き抜け迫る無数の手裏剣は妖しい光を帶び、さざ波の様に鴉達に迫り来る。

しかし陽向と美幸は鴉が絶対に守つてくれる信じているのか、うろたえずにその波を見据える。

鴉は人型に変化すると、翼を広げる。

翼は鴉の背中から離れて、鴉達の目の前で合体し回転しはじめる。

超スピードの回転を行う翼は円形の盾となり、彼らを手裏剣の波から守る。

ガガガガガガガ！

無数の手裏剣を防ぎきつたあと、翼を突き抜け鷲が現れる。

『鴉ううう！』

『鷲いいつ！』

そのまま鷲に突き飛ばされ、空中へ投げ出される鴉。  
そのまま鷲と刀で打ち合つ。

カカカカカと軽い音が絶え間なく鳴り響き、打ち合つ度に空に一條の光が宿る。

そしてお互に渾身の力を込めた力を以て斬撃を交差させた瞬間、剣気が衝撃波となり辺りの雲を吹き飛ばす。

そしてお互い鎧迫り合いの姿勢のまま地上へ落ちて行く。

『なる程、何がそこまで貴様を強くさせた?』  
『さあ。当ててみろ!』  
『語るに及ばず!』

鷲との間合いを空け、拳を突き出す鴉。

鷲は難なく受け止め、その反動で体を打ち上げ鴉の背後に回る。

振り向こうとする鴉だが、その前に鷲が後ろから鴉を羽交い締めにし、背中から刀を突き刺そうとする。

鴉は印を結ばず、己を手裏剣型に変化させる。

そして羽交い縛めにしている鷺を巻き込み猛回転し始める。

『おーおーおーおーおーおーーー!』

回転の勢いに暫く抗っていた鷺だが、やがて耐えきれず弾を飛ばされる。

いつの間にか東京の上空に出でたらしく、高層ビルの壁面へと叩き付けられた。

『ハアーーツー!』

氣合いと共に、体制を崩した鷺へ肉迫する鴉。

しかし寸前に射出された鷺の鎖に絡み取られる。

『舐めるな鴉うううつー!』

『ぬおおおーーー!』

鎖を力一杯に引き寄せ、振り回す鷺。

鎖に引っ張られた鷺はそのまま自由を奪われビルに激突せられ、そのまま引きずられる。

そして虚空に浮かんだ鷺へ接近した鷺はそのまま蹴りを無数に放つ。『ゴドゴドゴと鈍い音と共に鷺の体は大きくたわむ。

無数の蹴りのフイーチ シュに放たれた渾身の蹴りにより、今度は反対に高層ビルへと叩き込まれる鴉。

そして飛来して来た鷺の突進を何とか回避した鴉は、空に散る瓦礫を伝い距離を空ける。

それから超スピード。

コンマの世界で繰り広げられる戦い。

目に見えぬ速さで崩壊していく東京の住民たちは、空に舞つ瓦礫の中で無数に舞つ白と黒の影しか認識出来ていない。

中では鴉と鷺が剣を振るい、何度も何度も打ち合つてゐるのだ。

瓦礫を巻き込み寸断しながらお互いに剣舞を繰り広げ打ち合つてゐる鳥。

鷺の放つた一撃を受け損ない、鴉はまた吹き飛ばされビルの壁面へ叩き込まれる。

さらに鷺の突進が直撃してしまつ。

たが鴉はどこにハイクへ変化し、車輪に鷺を巻き込みビルの壁面を下降する。

『はああああっ！』

『ଶବ୍ଦବିଜ୍ଞାନରେ』 - ୧୮.

縦一直線に崩壊の始まるビル。

崩壊が地上に達した瞬間、今度は道路沿いに派手に土煙が上がり崩壊が始まる。

その土煙の中から鶯と鴉が飛び出し、再び対峙しあう。

崩壊したビルの、むき出しの鉄骨の上に佇む鷺に小鳥丸を向ける鴉。

『もう止める鷺、いや碎羽。那智の為に東京を滅ぼすなど狂氣の沙汰だ』

街には日が落ち、月の光が辺りを照らす。  
月をバックにまた空中戦を繰り広げる二人。

『貴様は思わぬのか！他の人間など要らぬと！居てほしい人間のみ存在してほしいと！』

再び鶴迫り合にする鷺が鴉に叫ぶ。

鴉もまたそう思っていた。  
美幸以外は要らないと  
美幸のみを守ればいいと。

しかし、それは護ることではなくただ善意の押し付けでしか無いこと  
漸く解った。

独りでは意味が無いのに。

本当に護るとは

『俺は、鴉は東京を護る。それだけだ！』

鴉の右ストレートが鷺の顔に直撃し、地面へと吹き飛ばす。

『ぐああああああっ！』

幾つものビルを貫通し、地面へ叩き付けられる鷺。

その側に降り立つ鴉。

刀は収めており、拳を突き出し徒手空拳の構えをとる。

鷺もまた刀を収め、鴉に倣う。

沈黙

月が煌々と照らすなか、時が凍てついたように佇む鴉と鷺。

『はあああ！』

『せえええい！』

お互いの気合いがぶつかり数多の建築物を破壊してゆく。

一瞬でお互いに詰め寄り、殴り合つ。

殴る度に大気が体を突き抜け、向こうにある物を破壊してゆく。

その後は神速の蹴り合い。

無数の蹴りが飛び合い、絡み合い、溶け合つて白と黒のカーテンを作り出す。

その合間を縫い、鴉のキックが鷲の右胸を穿つ。  
たじろいた鷲は天高く飛び、鴉もそれに続いて飛ぶ。

雲海の上では太陽が昇りつつあり、紫の空が広がる。

鴉と鷲はお互いに翼を広げ、鎌を構成しキックの体制をとる。

お互いに必殺技を放ち、切つ先が交わる。

『ケエエエエエ！』  
『ハアアアアーツ！』

眩い光が辺りを照らし、一瞬遅れて衝撃波が雲を散らす。  
天を稻妻が走り、壮絶な戦いの終わりを彩り。

『ぐつぬあああああつ！？』

鴉のキックが鷲を捉え、黄泉比良坂へと飛ばす。

そして飛ばされた鷲が門へと叩きつけられ、着地した鴉を陽向と  
美幸が迎える。

不意に美幸から那智が抜け出る。

美幸の髪はバツサリ抜け、元の髪型に戻る。

『那智…』

『碎羽』

ヨロヨロとふらつきながら手を伸ばし那智に近づく鷺。否、碎羽。

それは幽鬼の様で、さっきまでの威厳は無いに等しい。

『俺の、俺の元へ 那智……』

弱々しく縋る碎羽から一歩退く那智。  
その顔は明らかな嫌悪、拒絶。

「碎羽よ、私が恋い焦がれるは鴉そのもの。…お前ではない」

拒絶を受け碎羽はつめき声を上げ、刀を抜く。

『ああああああ…』

『鴉』

那智に向かい振り下ろされた碎羽の刀を刀で受ける鴉。

そして刃を押し返し、体をひねりがら空きの碎羽の体を横薙ぎに斬る。

カラーン…と碎羽の兜が落ち、碎羽の顔が露わになる。

口からは血が溢れ、白い鎧を汚してゆく。

その顔を撫で、泣きそうな表情で那智は告げた。

「愛して『いた』ぞ、碎羽…」

「な…ち…。…つ、ああ、おあああああつー」

蒼い炎に包まれ灰の彫像と化した碎羽。

崩れさる碎羽に美幸は泣きもせず、ただ哀れむかの様に風に吹かれ  
る灰を見つめ続けた。

朝日が完全に昇りきり、街は復旧作業に追われる人々で溢れかえる。

離れた場所にいる鴉達

鴉と那智は街に立ち入る陽向と美幸を見届け、さびすを返す。  
それに気付いた美幸は鴉を背中から抱き締める。

「行っちゃうの？」

『…鴉は東京を、東京の人々を護るものだから』

だから一緒にいられない。と告げる鴉に美幸は涙する。鴉は美幸に向き直り、鎧を外し美幸の肩を優しく包む。

「でも、何時までも君を護る。君の大切な人も」

君が何時までも笑顔でいられるように。

寄り添う美幸と鳴海に近づく陽向。そして鳴海の脇を肘で小突く。

「一緒に遊べないのは寂しいけど、あたしは忘れないよ。あんたの事」

自慢してやるんだ

あたしの友達はみんなを護るかつこいい鴉だつて!と満面の笑みで答える陽向に、鳴海ははにかんだ笑みで頷く。

美幸は頬から流れる涙を隠さずに、だが微笑んで鳴海に話す。

「私も忘れない。昔も今も大好きな人を」

鳴海は困った表情を浮かべ、そして  
「ありがとう」と消え入る声で答え、  
那智のいる方向へ走る。

もう良いのか？

ああ

なら…往こうか、鳴

ああ、往こう。

月が照らす夜

おれも、忘れないよ  
さよなら  
陽向、美幸。

数多のビルの下で蔓延るいのち、兎。

それは人の業が生み出した存在  
人の罪。

しかし恐れるなけれ  
兎を刈る者は必ず現れる。

黒い鎧を纏い、鞘に納めた刀を眼前に構え徒手空拳の構えを取る。

田の前の兎に向かい、誇らしく名を名乗る。

牙を成す鳥

『仮面ライダー 鶴、推參』

【最終羽了】

最終羽 鴉（後書き）

あなたには

護りたい人は居ますか

なら

護りたい人が笑顔でいられるようにしてください

ただ安全を守るだけではなく、その人が世界にいられるように

それが

護るということだと

私は思います。

完

仮面ライダー 鴉  
mask rider

KARAS

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9114d/>

---

仮面ライダー鴉 Maskrider KARAS

2010年10月10日22時05分発行